

武藤君との同僚としての

交わりにおける、その二齣、三齣

梯 明 秀

昨年（昭和四十四年）の十一月十八日に経営学部の祭原光太郎教授が急逝し、その告別式が二十一日の午後二時より故同教授宅において行なわれることになっていた。当日の金曜日には、私の衣笠キャンパスへの出講日であったので、この告別のために北白川まで行くには、三時限目の「社会科学」の授業は休講にするほかなかったが、第二時限目の「経済哲学」の講義を終えて突作に思いついたことは、経済学部の部長室に武藤君は居るかも知れないということであった。この思いつきのままに、教室から真っ直ぐに部長室を覗いてみたところ、私の直観どうりに、武藤君は来ていた。

「君、行くんだらう。」

「ああ、行くよ。車を呼んで、待ってるところだ。もうす

ぐ来ると思う。」

「そいつは良かった。便乗させて貰うぜ。研究室に、これ（『テキスト』）を置いて、すぐ来るからネ。オレが来るまで車を待たしとくんだけ。いいなあ。」

「解った。そうする。」

急いで研究室に帰って、室を片付けているうちに、受付から松見さんの電話が掛って来た。「武藤先生がお待ちになっています」というのであったが、「もう少し待っていて貰って下さい」と答えておいて、とにかく急いで下へ降りていくことにした。一階のエレベーターを出た私を見て、武藤君は受け付けの室から待ちきれかねたように出て来た。車は研究室の前まで回わしてくれてあった。

車のなかには手嶋君が、先に乗って待っていた。武藤君が「わたしは前の席にするから、あんたは後の方に、どうぞ」というので、「そうかい、そいつは済まん」といって私は、後席に手嶋君と並んで坐った。武藤君は運転手と並んで坐ったときに、「広小路で降りなきゃならんことになっているのだが……」というので、「それでも結構。広小路まで連れて行って貰っただけでも、助かる」と私は答えた。しばらく沈黙が続いて車は北野天神を過ぎて走っていた。そのとき、武藤君は、斜め後に顔を回わして、突然、私に話しかけてきた。「カケハッさん。あんたは、相変らず全共斗をアジツとるんと違うか。」

「冗談言っちゃ困るぜ。相変らずとは何だッ。オレは土曜講座で八学生運動に理性をーVというやつをシャベッていたじゃないか。」

「ああ、そうだったネ。」

三年前(卅四三年)の二月以降の土曜講座のスケジュールでは、その年に停年退職する六、七名の連中を、次から次へとシャベラせることになっていた。その最初の順番に当てられていた私は、右の標題で、二時間ばかり、シャベッて、そ

して質問を受けながらフリー・トーキングを六時頃まで続けた。二百名を越えた聴衆が集っていたが、そのなかに相当の年令になっている婦人が、五、六名も混じっていた。このような事実を、退職後であったか、それ以前であったか、武藤君に尋ねられるままに話したことがある。彼は、そのことを忘れていなかったのである。二年近く以前のこの対談のときに、彼は、「相当の年令の婦人？」と訝(いぶか)しげに呟(つぶや)いたので、私は「それは多分、大学へ入っている息子なり娘を持っている主婦じゃないか、と思う」と、彼にたいして、推測的な説明をしておいたのであった。

私たち数名のものが停年退職した年の、その前年の四十二年の十月八日には、羽田空港における反代々木系の諸派の先陣争いの様子がラジオで放送され、ついで各新聞にも大きく報道された。それ以後、学生運動は激化の一途を辿っていったのであるが、このような趨勢が、やがては全国的に波及する可能性を孕んでいる事態に直面して、私は、それまでに思索を巡らし始めていた思想的課題としての、「現段階の政治、経済的および文化的な状況にあって、人間の理性なるものは、いったい、どんな論理構造にあるべきであるのだろうか」と

いうことについて、いまだ不十分にしか構想できていなかったままで、それをシャベツたのだが、右の土曜講座の講義内容であった。この講演後の右の武藤君との対談では、このような思想内容のことまでには、話が進まなかったのであるが、とにかく、その標題の意味する常識的理解は、同君にも出ていたはずである。であればこそ、「ああ、そうだったネ」と武藤君は、二年ほど過ぎた以前の対談の事を想い起したわけであろう。ところで、車のなかでの武藤君と私とのあいだの話し合いは、それだけで途だえてしまった。手嶋君の方は、終始、沈黙していた。やがて車は、広小路のキャンパスの正面前に着いた。手嶋君は、ちょっと他所へ回るようになって、と、言うので、門前で別れ、そして、私は武藤君に案内されるままに、総長事務取扱としての彼の室に入ったのである。存心館の二階であった。

「こんな所に居るのか。まだ中川会館の方に移れないのかネ。」

「もう、そろそろ移ってもよいと思っているんだがネ。ところで、ぼくは昼食を喰べるんだが、中華そばにする。カケハッさん、あなたは何にする？」

「いやオレは毎日、朝が遅いので、いつも昼食を抜いている。君だけ喰べろよ。」

「まあ、そう言わんで、付き合えよ。半分でも、残せばいいじゃないか。」

「そうだな……。それでは付き合うことにしようか。」

注文した中華そば二つが来るまで、彼は、色々と書類の整理をしたり、来客に応接したりして、忙しそうであった。その間、私は室を避けてトイレに行ってきたり、時々連絡に来る事務の諸君に次々と話しかけたりしていた。そうして待っているうちに、中華そばが来た。二人で喰べながら、私は、彼に話しかけた。

「君、ついでに、このまま総長に居据ってしまつたら、どうだ。」

「いや、そういうわけには行かん。ぼくは、来年の三月末で学部長の任期が切れる。学部長間の互選で、このポストについたことになっているんだからネ。」

「ああ、そうだったネ。」

こんどは、私の方が迂闊なことになった。

私としては、武藤君に謎をかけてみる、というような意地

悪い気持は毛頭なかった。ただ、話しの序でに、いつもの例のごとく、口が滑ってしまったまでのことであった。しかし、この私の問いかけによって、当時の彼が、三月末の任期切れを心待ちにするという心境にあったことを、私は素直に尤もなことだと受け取ったのであった。ところで実際は、その翌年の二月の初めには、新しい総長選挙規程にしたがって新総長に選出されている。そして就任後、僅かに八ヶ月にして彼は脳出血で倒れ、旬日に及ぶ危篤状態のなかで遂に意識を回復することのできないまま、亡くなったのであった。彼の没後、他学部の或る親しい某教授に聞かされたことであつたが、武藤君は「総長就任のさいには、担当に悩んだ」とのことであつた。

武藤君が脳出血で倒れて安井病院に入っているということ、最初に電話で知らせてくれたのは総務課の久保君であつた。この久保君は長い間、学生部の事務室に居たので、十三年間も旧吉田寮の舎監を勤めていた私とは、親しい間柄であつたし、同君としても、武藤君と私との古くからの交際関係を知っていたからのことであつたと思われる。武藤君は、頑健な身体でありながら、煙草は別として酒は全く飲まない。

武藤君との同僚としての交わりにおける、その二齣、三齣(梯)

そしてタフな根性の持主であつた。この強靱な性格と健康な身体については、自他ともに認め合っていたところであつたし、私としても、この点から見て、総長の任期の四年間は、押し通すであらうし、さらに四年さきの改選にも、その実績が物をいって仮りに再選されたとしても、まだまだ押し通して行けるのではないか、と思つていたのであつた。この予測が、あまりにも早く崩れたことに、私はショックを受けたのであつた。いま、この拙文の冒頭に、武藤君との日常茶番の会話を、あえて書き綴つておいたのは、このときが同君との最後の顔合せになつてしまつたからである。これも亦、まったく予期できなかったことであつた。

ところで私は、ここに、この原稿用紙にペンを走らせているのは、武藤君を追悼するための文章を書こうとしているのではない。同君のための追悼の辞は、十月八日の彼のための大学葬の時に述べられたものが、すなわち、総長事務取扱の近藤繁人教授のもの、名譽総長の末川博先生のもの、
『学園広報』に携戴されている。学園内における哀悼の意志表示は、この二つの文章によって十分に代表されているわけであるから、これらに敢えて追加するような意志表示を、私

のようなものが遅ればせながら改めて文章化する必要は、ないと考えられるのである。勿論、武藤君の急逝を悼む情においては、私も人後に落ちるものではない。それにしても、同君にたいして、追悼の情を捧げようとするばあいには、この三年間のうちに次から次へと亡くなって行った他の同僚たちの名前や顔を、私としては、武藤君の顔とともに、並べて念頭に浮かべないわけにはゆかないのである。このことは、私だけの心境ではなくて、おそらく立命館の全教職員の共通の心境でもあるろう、と思われる。

試みに、それらの先き立って逝去されていた諸氏の名前を挙げてゆくとするならば、前記の祭原君の告別式に行くときの車に同乗していた手島正毅教授は、武藤君より一足先きに、すなわち、本年の八月十三日に死亡して、九月五日には京都で府の教育委員会と立命館大学内部の有志の人々の発議によって「追悼の集い」が行なわれている。さかのぼって同じ本年（廿四十五年）の三月八日には、産業社会学部の高橋良三教授が急逝、そして十日に自宅で告別式が行なわれている。その前の年の四十四年には、三月五日に、法学部の前芝確三名誉教授が、五月十三日には同じ法学部所属の若き哲学者、

阿部敬吾教授が、続いて十一月十八日に前記の祭原光太郎教授が、つぎつぎと逝去されているということになっているし、さらに、その前年の三十三年には、経営学部を停年退職したばかりの小椋広勝教授が、苦痛に耐えた末の十一月六日に亡くなり、それから僅か四日後の十一月十日に経済学部の井上次郎名誉教授が急逝する、ということになっているのである。以上に挙げた名前の諸君は、いずれも、同僚としてだけでなく私的交際においても、私とは非常に親しい間柄にあつた、そのかぎりで、私としては、これらの諸君を追悼するための多くのエピソードを、鮮明に記憶しているのである。さらに理工学部に移すと、以上に挙げた諸君のばあいのようには親しい交際を持つことができなかったのであるが、四十三年の一月二十八日に倫理学担当の浅井潔教授が、翌四十四年の三月二十五日に物理学専攻の橋本一郎教授が、続く四十五年の二月二十日に化学専攻の田中正三郎特任教授が、というように一年毎にあい次いで逝去されているのを知るのであるが、以上に挙げて来ただけでも、計十一名にも及んでいる。それだけではない。事務系列および高中関係のなかからも、さらに四名の逝去者を出してきていることを、私は、この拙

文を執筆している過程で、はじめて知らされた。調べて貰ったところによると、旧経済学部事務室に長い期間を勤務した後、高校の事務室に移っていった天野三夫氏が、四十四年の三月九日に、逝去されており、翌四十五年には、それぞれ四十年および三十二年の定年退職者であるが、人文科学研究所の元主事であった市村春雄氏と、元職員課長であった中島定雄氏とが、八月二十七日と九月十八日とに、あい接して逝去されており、続いて十一月二十六日に、同じく定年で前年の四十四年に退職したばかりの高校の元校長であった平口正雄氏が、逝去されているのである。これらの諸氏については、私としては、役職上の関係で接触の少なかつた間柄にあつたので、それぞれに異なつた人柄と風貌とを、いま、ここに鮮やかに回想することが出来るのであるが、各氏の逝去の通知を受けていなかつたために、葬儀には、いづれにも参列しないままで、今日まで過してきたわけである。遅延ながら、この紙上で追悼の意を示させて頂くことにしたい。

さて、これらの四人の方々の逝去されたことについては、事務系列の職員の間では、周知のことであつたと思われるが、前記の大学の各学部の教員系列のなかの逝去者に加算

すると、実に、十五名にも及んでいたわけである。しかも、これら十五名の同僚の方々を、立命館大学が、ここ三年間のあいだに、続々と「あの世」に送つてきているというところは、何とも異様で不気味である。「現在、立命館大学には妖気が漂っている」と思うのは、私だけのことであろうか。

ところで、これらの十五名の逝去者たちのうち、高中、事務系列、理工学部および法学部に所属していた九名の方々を、仮りに除いてみると、残りの六名は、すべて旧経済学部に所属していた教授たちであることになっている。

現在の経営学部が旧経済学部から分離したのは、三十七年の四月であり、それまでは小椋君も祭原君も経済学部のスタッフとしての親しい同僚関係にあつたし、高橋君も、四十年の四月に産業社会学部が新設されるまでは、経済学部にも所属していた。だからといって現在の経済学部に、まだ引き続いて「妖気前線」の中心が残っている、と私は言うつもりはない。併せて六名もの旧経済学部の同僚を、この三年間のうちに「あの世」に送つて来ている現状のなかにあつて、どうかこうか生き残っている私としては、次の順番が迫つて来ているように感じないわけにはゆかない、というだけのことである。

る。そして、いま故武藤君との同僚としての長い付き合いを想起するにつけても、私の念頭には、他の五名の諸君についての生前の想い出が、同時に交錯して浮んでくるのを禁ずることも、また不可能なことと言うほかはない。

そこで、この交錯した色々の想い出を整理するために、立命館への赴任の年次を調べてみると、手嶋君が三十九年四月で最も新しい。その前は、小椋君が三十四年の十月となつてゐる。この両君のほかは、皆、古くから在籍している。私自身の赴任は、二十五年の七月であるが、祭原君は、私より遅れて二十七年の四月である。残りの三名のうち、井上次郎名誉教授は、現在にも病氣療養中の井上巖次郎名誉教授とともに、京都大学の経済学部を卒業した後、直ちに、したがって戦前の立命館大学の法経学部に、赴任していたのであるし、その経済学コースの中核的存在であつたはずであるが、高橋君と武藤君とは、ともに、右の両井上君の講義を聞いたはずの立命館の法経学部の出身である。

履歴書によると、高橋君は昭和八年三月に、武藤君は同一年三月に、それぞれ、法経学部を卒業して直ちに、すなわち、その翌四月に、研究生となつて、研究者としての活動を

始めていたことになっている。すなわち、高橋君の方は、同時に立命館商業学校の講師をも兼ねながら、同十年四月にいたつて法経学部および専門学校の講師に、さらに、同十二年四月に法経学部助教兼専門学校教授にプロモートしている。そして二年後の十四年四月には、立命館大学の教職を離れて満鉄に入社、上海に転出しており、その四年半後の依願退職後にも、上海にとどまって中日文化協会の理事や上海日本経済会議所の調査課長などを兼任しながら、敗戦を現地で迎えたことになっている。そして二十一年の引揚後に一時は、すなわち同年の八月以後は、大阪府の鑄物工業組合の書記長をやつていて、二十二年の四月に立命館に帰り、法経学部の専任講師に、ついで翌五月に教授に昇進している。

これにたいして、武藤君の方は、戦前、戦中、戦後をつうじて、立命館大学での研究生生活を続けている。十七年四月に講師に、その翌十八年十月に助教に、というようにスピーディーに昇進している。武藤君が召集されて北支那で經理士官として服役していたのは、おそらく、十八年十月以後のことではなかつたかと推測される。このように両君の履歴を並べて比較すると、武藤君が高橋君より先きに教授になつてい

が、高橋君も、また両井上教授たちを中核として戦前の立命館を育成してきた人であったことは明瞭な事実であり、そうした実績のある人として、戦時中は、一たん立命館を去っていたとしても、両井上教授を中核とした戦後の法経学部、経済学コースを、および二十三年に新制に切り替えられたさいに、法学部と経済学部との分離後においても、その経済学部を、構成していた陣容のなかで、武藤君と並んで、ともに重要な役割を荷うことになっていたはずのものと、誰にでも推測されうるわけである。

以上のように、旧経済学部所属の六名の逝去者の赴任年次を遡ってゆくことから、戦前の立命館のことにまで書き綴ってゆかねばならないことになってしまったのであるが、この戦前のことについて書くことは省略するとしても、ここでは、すくなくとも戦後に発足した旧経済学部の歴史を辿って、みて、そこに色々の想い出が、私の念頭に去来するのを、これまた抑制しかねるわけである。しかし、この拙文のなかでは、私の昭和二十五年の赴任以後に、私が、今は亡き武藤君、高橋君らに協力して、経済学部の充実に努力した思い出の二齣、三齣のことについて記してゆくことだけに限ってお

武藤君との同僚としての交わりにおける、その二齣、三齣（梯）

くことにしたい。それにしても、これらのことについては、経済学部の現在のスタッフ諸君には、おそらくは、ほとんど知られていないだろうと思える過去の事柄ではあるにしても、立命館の現在の経済学部の前史を綴るための一つの資料になることは確かなことであると、私は思っている。

そこで私としては、この経済学部の前史を背景にして、高橋君や武藤君との私の交わりを細々と書き並べてゆくつもりにしていたのであるが、ここまで書いてきて、すでに編集部から指示されていた頁数を、遙かに超過していることに気づいたので、これらのことについての数々の思い出のすべてを、ここで、年次的に書き綴ってゆくことは、残念ながら諦めるはかなくなったというわけである。それにしても、この拙文に付けた標題どうりの何らかの内容を与えるために、以下のことだけは、頁数の超過にかかわらず、これだけを付け加えておかないと、この拙文は、起承だけあって転結のないものになってしまうので、あえて、編集部を制限を犯したと思う。

二十五年六月の私の赴任以前に、立命館では大学院が発足していた。すなわち、同年の二月に、法学部の民法法専攻の、

文学部は東洋思想専攻の、経済学部は経済政策専攻の、それぞれの修士課程の設置を申請して、いずれも、翌三月に認可されていたのである。ところで、経済学部では、理論経済学なしい経済史の専攻を希望して大学院に入った学生諸君を、

政策専攻の枠の中に閉じこめておくことの、不合理であることが、教授会で問題となり、さしあたり経済理論専攻に拡大することに決めて、翌二十六年の十月に申請したのであるが、不認可となった。続いて二十七年に、法学部が民事法の博士課程新設の申請を出したのに対応して、経済学部も経済政策専攻の博士課程の新設を申請したのであるが、法学部の申請は認可されたのたいして、経済学部としては、その認可されるのが難しそうであるのを見とおして、その申請を取り下げるといったことになった。翌二十八年十月には、再び経済学専攻の修士課程を申請して、これまた取り下げにするほかはないという有様であった。さらに、二十九年に法学部が公法専攻の博士課程を申請して認可されているのたいし、経済学部は、三十二年になって流通経済政策専攻という名目のもとに博士課程の設置を申請しているのであるが、これまた自発的に取り下げている、ということになっている。こうし

た大学院の設置のための経過を見れば、教授陣容において、経済学部の方は法学部に比べて見劣りするということは、誰の眼にも明瞭なこととして受け取られるほかなかつたわけである。

この点は、経済学部のスタッフのなかでも、共通に自覚していたことであつて、そのかぎりでは、まず教授級だけのスタッフの充実という点について、それぞれの立場で努力して、二十五年から三十二年までの間に、教授級の人事において新陳代謝が行なわれていって、そして、個人審査においてフリーパスするような実力のある同僚諸君を徐々に増加させてゆくことができたことは、事実であつた。こうした経過のなかで、武藤君と私との間に一致した方針は、マルクス主義の立場にあつて、そして傑れた業績を持っている人を、なんとかして教授に迎えようとするのであつた。武藤君と私の同僚としての付き合いのなかで、もっとも重要なことは、この方針のもとにおける協力関係であつたとせねばならぬであらう。そこで、このことだけに触れることによって、武藤君についての、その他の多くの想い出を書くことは、この拙文では、省略することにした。

こうした武藤君への私の協力関係は、二十六年から殆んど十年間も、拗執に続けられていたのであり、併せて六、七名に近い人びとを次から次へと取り上げて来たのであるが、しかし、その何れの場合にも、情報を外部から聞いてくるのは、いつも武藤君であった。そして私は、ただ、その相談に乗って共に動くというだけのことであった。たとえば、前記の故手嶋君が、大阪の経済研究所の嘱託を辞して広島へ行ったという話を、武藤君は私のところへ持ってきて、当時の神戸大学の学長であった古林喜楽氏と一緒に訪ねたことがある。そのさい、古林学長から逆に中華料理の一席を設けられて、その馳走になりながら「広島大学の方で手嶋君の受け入れを非常に苦勞して世話した人がいるので、その人の諒承を得なければならぬし、このことは恐らく難しいのではないか」とアドバイスされたので、それでは己む得ない、と二人で諦めて帰るといふこともあった。——因みに、この「世話した人」というのは、現在の建林正喜教授のことである。——こうした協力を何回となく繰り返したが、いずれも不産に終わってしまった。そして最後に成功したのは、井上晴丸という有名な黨員学者を、教授として迎えることができたことであつた。

武藤君との同僚としての交わりにおける、その二齣、三齣（梯）

一八五（八一九）

この情報も武藤君が外部から聞き出してきたものであつた。しかも、本人の井上氏も諒承済みというので、教授会に提案することにした。しかし、この人事が教授会において承認に漕ぎつけるまでには、三年も、かかっているのである。そのあたりの事情について述べることは、ここでは省略することにして、その後の人事の進捗にかぎって述べてゆくことすれば、この井上晴丸氏が教授として赴任した三十四年の四月に、武藤君は学部長となり、そして、その秋の十月に、この新任早々の晴丸さんの配慮を通じて小椋広勝氏を教授として迎えることになっている。そして、この方向の努力の延長として、高橋君が学部長になった三十五年の四月に、白杉庄一郎教授を滋賀大から本学部に移して貰うことにしたうえで、——しかし残念ながら、同君も、赴任後、一年余で逝去されることになったので、——さらに大阪市大から、相沢秀一教授の赴任を条件として、三十八年十一月になって、経済学専攻の修士および博士の両課程を同時に申請して、双方とも、翌三十九年三月に認下されるにいたる、という順調な経過を見ることができたわけであつた。

さて武藤君は、三十五年の八月から三十九年三月まで、教

学部長に、続いて教学担当理事になっており、そのかぎりでは、学園全体に係わる任務に就いて忙殺されているので、おのず

から経済学部内の人事の中核から離れてゆくことになり、それに代って登場してきた高橋君の意見が、その後の人事に重要な役割を演ずることになる。したがって、武藤君と私の協力としての教授陣容の充実への努力は、晴丸さんの人事をもって区切られる、ということができるのである。しかも、それは、経済学部に大学院を設置するための基礎作りの一つであるに止った、というわけである。しかし、晴丸、小椋の両教授を迎える前後から、助教授以下の人事についても、従来のように京大だけに頼ることを止めて、全国の各大学から優秀な研究者を迎えるという方針が、そろそろと固りかけていたし、さらに、マルクス経済学と近代経済学とを併行させて充実してゆく、という方針どおりに、人事はスムーズに運んで、三十七年に経営学部を分離さすまでの旧経済学部は、全国の何処の大学の経済学部比べても、勝るとも劣ることのないような陣容にまで、ふくれ上っていったのである。ここまで書いてくると、現在の新任の同僚諸君にも、当時の旧経済学部を構成していた全陣容を、想い浮かべることができ

るであろう、と思われる。

ところで、以上に述べてきたような武藤君にたいする私の協力関係が、どういう動機で生じたのであるか、ということについて述べるとするならば、さらに頁数を費やさねばならないことになる。しかし、このことについて全く触れないわけにはゆかないので、ただ要約的に触れておくことにしたい。二十五年の七月に、私は、当時の経済学部を置くことになったことについては、まえにも記してきたが、その当時には、この経済学部のスタッフが、どういう人たちによって構成されているのか、ということについて、まったく知らなかったのである。まず第一に知った人は、岡山大学にたいして私の人事について挨拶に來られた故井上次郎学部長であった。ついでに岡大構内の拙宅にも立ち寄られるとの事前連絡があったので、粗餐を用意して待っていた。そして来訪を受けて、まず一献をと、お奨めしたのにたいして、「私は、お酒は頂けませんし、帰りの汽車の切符も、もう買ってあるので」と言われ、半時間ばかりで用件だけを済ませて直ぐにも帰られようとするので、初対面のことでもあるし、同教授の意志を尊重して、駅まで私は見送りに行った。温厚で寡黙な人柄は、

このときの第一印象のままに、その後の長い付き合いのなかで、すこしも変わることはなかった。しかし、その初対面のさいに、これから私が移ってゆくところの立命館大学の経済学部内部の事情などを、雑談的にでも聞かせて貰えるだろう、という私の期待は、裏切られたことになった。

ところが、これらの内部事情を、最初に私に詳しく伝えてくれた人は、ほかならぬ当時の学生部長の役職にあった武藤君であったのである。それは、私たち家族が旧吉田寮の一隅にあった空家に転住した八月十五日の、その以前の七月末のことであったか、それとも九月の初めの頃であったか、その記憶は、現在の私の意識のなかでは漠然としているが、この寮の一隅を私の住宅にすることを、承認する立場にあった人は、直接的に学生部長であるはずであるから、私は、この点で、まず武藤君の好情に浴したことになるはずである。しかし、武藤君との初対面のときには、この件について何も触れないで、早速ながら、どういう理由で私が経済学部を置くことになったのか、ということについての経緯を、私の赴任を待ち望んでいたという心情を示すなかで、簡単に知らされたのであった。私は、このことを初めて聞かされて当

武藤君との同僚としての交わりにおける、その二齣、三齣(梯)

一八七(八二一)

惑したものである。武藤君が「このイキサツを、もっと詳しくお話ししましょうか」というのを、私は遮って「それは困ります。そのイキサツについては何も知らないことにして通すことにさせて欲しい」と答えたのであった。この会話は、現在の私の意識のなかにも鮮明な記憶として残っている。九月の中甸の教授会において、私は新任の挨拶をした。そのときには、何事もなかった。しかし「なにも知らないことにして通す」としても、新しい同僚の諸氏たちの全員は、この経緯を十分に知ることであるから、私としては、諦めの上での一つの覚悟を、心のうちに決めておくほかなかったわけであった。ところで、十月に入ってから以後の毎回の教授会で、当時までに学生たちの行なった色々な動きについて、それらを学生部長としての武藤君の責任である、という形で追求することが、繰り返えされたのであって、そして年末には、武藤君は学生部長を辞任して、井上巖次郎教授が、それに替る、ということになる。――補導主事の制度が学園内の各学部を実施されることになったのは、この時機においてであった。――その毎回の教授会の席において、私は、学生たちの起こした諸事件の内容について何も知らないに拘わらず、

ただ問題の仕方という形式的な発言でもって、武藤君の立場を弁護するという態度に、あえて出るようになった。また、私のための歓迎の意味を兼ねた秋季の懇親会にも、そのような同じ出しゃばった行動をとって、私としては、馬鹿な眼にであったことがある。その懇親会の会計を担当していたのが、高橋君であった。そのことに関連してのことであるが、まもなくして、「すべて私が悪かったです」と詫びられて、この経済学部「こういう人も居るのか」と感銘させられたのであったが、高橋君との、その後の長い付き合いにおいて、同君は、何事についても何らかの問題が残るような処理の仕方を、するような性格の人柄でないことを、私は確認することができたのであった。そのような繊細な心づかいをもって、同君は、私の赴任の頃までに、学部内の諸問題の処理にあたっていたのであり、特に、学部内の研究条件の充実という点において、同君なりの見識をもって努力しつつあったことに、私は、赴任の翌年になって、気が付かれたのであった。

戦後における立命館大学にたいする外部から眺められたかぎりのイメージなるものには、敗戦後の日本の国民の全体がすべての分野において民主主義的に転換すべきである、とい

う課題に取り組みつつあったなかで、この国民的、ないし社会的な課題をば先き取りして、この大学そのものを、その一拠点として構築しつつあるもの、そのかぎりで、戦中期の禁衛隊としての学風を一掃していたもの、としての信頼感に裏づけられていたものであった。そのいみにおいて、末川先生を総長とする立命館大学なるものの内部運営もまた、教職員全体が一致して大学の民主化のための意気を横溢せしめているはずだ、と私は予想していたのである。しかし、経済学部に赴任した年の秋の何回かの教授会をつうじて、私の強く感得したことは、この大学全体の民主々義的な運営ということにおいて、なお幾多な困難を抱えていた、ということであった。いいかえると、外部からのイメージには程遠い実体を、私は、経済学部の内部から体験させられた、というわけである。そうした体験から出発して、私は、まず経済学部の内部の運営において、他学部に劣らぬ実績を生み出してゆくほかない、という気持になったのであった。また、そういう動機でもって、武藤君への上述のような協力とは別箇に、私は、高橋君の意図するところの研究条件の民主化への努力にも、翌二十六年以後において、ズーと協力することを続けてきた

のである。こうした意味で、旧経済学部の前史を迎るばあいには、武藤君と私との前述のような協力の経過のほかに、同時に高橋君との協力関係の経過をも、ここに付け加えて書いておかないと、私の回想としても片手おちになる。といったつもりのもとに、この拙文の初めのところで、両君の履歴を並べて見ておいたのである。

しかし、この高橋君への協力関係の経緯については、この拙文では、これ以上のことを述べることを諦めるほかないのであるが、ただ一言だけ附言しておきたいと思うことは、高橋君と武藤君との間の同僚としての関係のことについてである。両君は「経済学部のなかにおいて、お互いにライバルと思っているのではないか」というような質問なり噂さを、他学部の人々から、後々までも、私は聞かされてきているのである。しかし、両君にたいする私の別々の協力関係から判断すれば、両君の性格は、たしかに対蹠的であるが、だからといって、両君が、何らかのポストのためとか、あるいは、何かの見解の相違とかのために、相互に搦み合うといったことは、一度も、なかった、と私は言い切ることができる。他学部からの両君にたいする見方のなかには、両君ともに立命館

の出身であって殆んど同じ年配の教授として、ホープフルな将来性を期待する、という前提が含まれているのではないかと私は逆に憶測したいと思うし、また、いま、両君の逝去後になって回想してみると、両君がライバルズな関係にあったことが、かりに事実とするならば、そのことは、旧経済学にたいしての、いや、それだけでなく、母校である立命館大を全体にたいしての、両君の貢献度が、ほとんど同程度のものであった、ということを物語っているだけのことではないかと私には思えるわけである。その貢献度について、違いはあっても、強いて優劣を問題にすることは、すでに故人となつてゐる両君にたいする礼節を欠くことになるし、また、そのかぎりでは、ライバル云々の噂も、やがて消え去ってしまうはずのもの、私は期待している。

ところで、すでに故人になっているのは、武藤、高橋の両君だけではない。さきにも記してきたとおり、旧経済学部の同僚のなかから、これらの両君を含めて計六名の諸君を、さらに、学校法人としての立命館の教職員全体としては、十五名もの諸氏を、ここ三年間のうちに「あの世」に送っているわけである。これらの故人への追憶も、生き残っている私を

も含めて、現在の立命館の同僚の諸君においては、時の経過とともに、漸次に薄まってゆくことも、また、やむをえないことであろう。しかし、各故人の遺族の方々にとっては、その悲しみは深くして、しかも長い、ということをおぼわなければなるまい、と思われる。今後において、立命館の関係者のなかから、同じような速さで、死者を統々と出すことは、なんとかして喰いとめてもらいたいものと、誰にも思われていることではなからうか。とくに、学園内において役職についていたことの故に、犠牲者を出すということが、今後において絶対に無いことを希って、極めて常識的な意味でもって、「立命館大学に理性を！」ということを、私は、心秘かに念じているものである。

補記

—(四十五年十一月上旬) —
—(四十六年二月十二日) —

学会委員の一人から、「武藤先生についての思い出を何か書いて貰うことに決った」と、私のところへ連絡があったので、即座に、私は承諾した。昨年（四十五年）の十月の中頃であった。夏の休暇中に、旧著の再刊のために附ける一文章を執筆し始め、九月、十月と、この執筆の仕事を続けていたのであったが、事情があつて、この仕事を暫ら

く見合すことにしようと思つていた時であつた。そういった時点でもあつたので、イメージな気持ちで、編集部を要請を引き受けてしまったのであつた。

故武藤君について追憶できることは、私個人としても少なからず持つてゐる。しかし、いざ一つの文章に纏めようと心に決めたときには、同君について回想しうる事柄の一つ一つは、最近のことは別とすると、十年も隔てた過去のことについては、私の脳裏に次から次へと浮んできても、それらの一つ一つの記憶表象は、鮮明なものもあれば希薄になつてゐるものもあつて、しかも、相互に錯綜してゐるのである。いわば漠然とした一つの全体表象になつていて、この全体表象を作つてゐる一つ一つの個々の記憶内容を、すくなくとも時間的な順序で、前後関係を明確なものに整理するためには、たまたま面談することのできた若干の同僚たち——古くから立命館に在職してゐる同僚たち——と雑談的にでも話し合つて見ることが必要であつた。こうした試みを続けてゐるうちに、現在の立命館の各学部と同僚たちにたいして、というように広く考えなくとも、すくなくとも経済学部現在のスタッフにおいて、おそらく未知

の過去の事柄に属している事柄を、記していくならば、私の綴る文章も、あるいは、なんらかの意味を持つのではないか、という気持ちになったのである。

こうした気持ちに落ち着いた時期に、経済学部現学部長の足立君から、「そのような意図で書いて呉れたら、学部の歴史を綴ることになるし、旧くから教授として人事にタッチした人は、他に居なくなってしまうので、ぜひ纏めておいて欲しい」というように、おだてられたこともあって、そうした意図のもとに、執筆を始めたのであつた。そして、戦後の経済学部の歴史を辿るなかで、故武藤君の姿を、事実に加えて客観的に浮び上らせて見よう、というような考えを、一応、私の念頭に置いていたのである。このために、二、三の部局に居られる事務の方々に、若干の資料の作製を依頼して、そして、数名の諸君の協力を得たのである。しかし、このような私の構想は、まことに結構なことであるにしても、執筆の過程で、私の綴ってゆく文章が、故武藤君を偲ぶような内容にまで、なかなか持つてゆけないことに気が付いてきた上に、八月以来の疲労の蓄積にも耐え兼ねて、この執筆の仕事は、一度は

投げ出してしまったのであつた。だが、編集部からの強い再要請に断り切れず、指示された結末の付け方に添うて、どうかかこうにか纏め上げることができた、というのが前掲の拙文である。

以上のような経緯もあって、前掲の拙文は、故武藤君を追悼する内容としては——拙文のなかで断り書きをしてあるものの——私自身にも不本意なものになっている。この点が、ズッと今まで気がかりであつたので、この初校ゲラの校正にさいして、この「補記」を追加することにした。すなわち、この拙文の標題は、「武藤君との同僚としての交わりにおける、その二駒、三駒」となっているが、私の是非とも書いておきたいと思つていた事柄が、実のところ、省略されているわけであるから、これらの「二駒、三駒」を、以下に箇条書きに追加しておきたいと思う次第である。

一、私は、三十四年の十一月に、博士の学位記を授与されている。それまで私は、或る理由のために、この学位の請求を自ら抑えてきたのであつたが、翻意して、この請求を決意することに動機づけてくれた人が、ほかならぬ故武藤君であつた。

二、戦後の立命館の初代学生部長であった関係からであるうか、それとも、当時から日朝友好の外部団体に關係していたためでもあろうか、武藤君の許には、在日朝鮮人の子弟が、数多く集っていたし、また、韓国からの留学生たちの世話をも、同君は、色々とやっていた。それらのなかの若干名は、毎年の私の担当していたところ、学部のみならず大学院のゼミにも、参加して来ることになっていた。

これらの朝鮮人学生は、一般の日本人学生の大量のなかの少数であった理由もあって、私は、個人的に親しくなっていたし、なかには韓国の大学に赴任している現在にも年賀状を貰うという人も居るのである。これらの一群の朝鮮人の卒業生と私との接触のなかにも特殊な想出があるのであるが、その背景には、武藤君の日朝友好への努力と実績とを、同時に、念頭に浮べないわけにはゆかない。

三、故武藤君の学外活動は、さらに日中友好の方へも広がっていた。すなわち、日中間の友好貿易や学術交流のために尽力していたようであるが、武藤君のような行動力を持ち合せていない私としては、それらの外部組織なり団体なりの事情については殆んど無知のままに過ぎてきた。し

かし、学部教授会の承認のもとに、同君は、二度ばかり中国を訪問している。そうした関係で、同君は、中国にも若干の知友を持ち、そして文通もしていたようである。

数年以上の前のことであるが、同君が学内の役職を離れた時期でもあったのであろうか、或る日、同君の研究室に珍らしく電気が付いていた。ノックもせずにドアを開けると、懐しい中国茶の香りが漂っている。そして机の上には、土産用の字画が数枚ばかり丸めてあった。それを拵げて見ると、研究室の飾りには相応しいものだったので、私は「一枚、貰うぜ」といって、差し出された中国茶を飲みながら、静かな雑談に暫らくの間を過したことがある。大学協議会などでは、武藤君を論難することの多かった私ではあったが、長い同僚としての交際をつうじて、こうした場面にも見られるような、相互信頼にもとづく穏やかな間柄が、底流として貫いていたのであった。その時に貰った一幅の字画は、現在にも、私ひとりに当てがわれた形になっている名譽教授室のなかの衝立（ついたて）に、ピンで留められている。これが、故人となつてしまった同君からの私への遺品になるということは、夢想もできなかったことである。